Catwalk

[特集]

みんなのコンサートレビュー

まつもと市民芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
04
2024
Summer

2024年４月21日（日）
まつもと市民芸術館 主ホール
出演：石丸幹二　木ノ下裕一　倉田翠
演奏：クリヤ・マコト（ピアノ）
塚越慎子（マリンバ）
林周雅ストリングス
（林周雅　篠原悠那　堀内優里　小畠幸法　鈴木智）
編曲：萩森英明
舞台監督：黒田大輔
照明：水上雅史
音響：近藤健一朗

0歳からお年寄りまで、みんなのコンサート

『はじめまして！』

芸術監督団3人がそろい踏み “ひらいていく劇場”がいよいよ始動！

令和5年度から1年間かけて打合せを重ね、互いの専門分野を超えてアイデアを出し合い、さまざまな準備を進めてきた芸術監督団、石丸幹二（ゼネラルアートアドバイザー）、木ノ下裕一（団長、演劇部門担当）、倉田翠（ダンス部門担当）のお披露目となる企画～0歳からお年寄りまで、みんなのコンサート～『はじめまして！』が開催されました。〝みんなのコンサート〟のサブタイトル通り、0歳からお年寄り、障がいのある方など、だれもが参加できる〝ひらいていく劇場〟の姿を披露するようなひと時となりました。

会場には、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんと一緒におめかししたお子さんがいっぱい。これまでもお子さん向けの催しはありましたが、またひと味違う新しい光景に出会えた、そんな気持ちになりました。

オープニングは、芸術監督団の自己紹介から客席の様子の紹介へ。0歳、1歳、2歳、3歳、4歳、5歳、小学生、中学生～大人と順番に呼びかけていきます。するとお客様は「ここにいるよ」とアピール。手を挙げられない

Photo:Takeshi Yamada　Text : ichikomai

小さなお子さんを高々と掲げるお父さんの姿も見えました。

コンサートは小さなお子さんも知っている「ドレミの歌」「ぞうさん」、子守唄の「ねんねんころり」、木ノ下監督が曲の情景を解説したヴィヴァルディの「四季」など、ポップス、クラシック、アニメ、洋楽によって構成されていました。倉田監督はときに客席に降りて踊りながら子どもたちとも交流。その倉田監督によるオリジナルの振り付けで、客席も一緒に踊った米津玄師「パプリカ」では、お客様皆さんが前の席から後ろの席へ、後ろの席から前の席へと全身を使ってウェーブを起こしました。パッヘルベルの「カノン」の演奏では、「となりのトト口」「星に願いを」「ぼくドラえもん」「翼をください」「いつも何度でも」「ロミオとジュリエット」「アンパンマンのマーチ」「愛は勝つ」などの曲を紛れ込ませて、曲当てクイズの趣向で、音楽の面白さを伝えてくれました。最後には石丸アドバイザーが映画『リトル・マーメイド』の「アンダー・ザ・シー」を披露し、圧巻の歌声を聴かせてくれました。

会場はお子さんが安心して過ごせるように暗転などはせずに、泣き出したりトイレに行きたくなったら自由に出入りできるようになっていました。お孫さんに笑顔を向けるおじいちゃんおばあちゃん、家族と一緒だからこそリラックスしてコンサートを楽しんでいるお母さんたちの姿も印象的で、芸術監督団の個性を生かし、工夫した内容も含めて子どもから大人まで、思い思いの楽しみ方ができる催しでした。もちろん芸術監督団、ミュージシャンの皆さんも歌ったり演奏しながら楽しんでいるのが伝わってきました。

～0歳からお年寄りまで、みんなのコンサート～『はじめまして!』を通して、改めて串田和美芸術総監督からバトンタッチし、引き継ぐべき大事なもの、そして3人の芸術監督それぞれの持ち味を存分に発揮した新しさもクリアに見え、まつもと市民芸術館の新たなる船出、向かう方向への所信表明がなされたようでした。

「またやりたい」（木ノ下）「皆さんのホームに」（石丸）との言葉は、今回は参加することができなかった皆さんも含め、まつもと市民芸術館がだれにとっても優しさにもあふれた空間であることを伝えているようでした。

歌い、踊り、音楽の解説をしたり、たくさんの挑戦をした木ノ下裕一団長

芸術監督団 団長／芸術監督【演劇部門】

木ノ下裕一

ステージの上で、赤ちゃんからお年寄りまで色とりどりなお客様のお顔を眺めていて、ふつふつと「ずっと、これがしたかったんだ！」と思いました。年齢やジェンダーや障がいの有無や属性にかかわらず、広く集える劇場。もちろんパフォーマーである私たちも含め、全員が「ここに居ていいんだ！」と思えるような公演。私たち新芸術監督団がめざす“ひらいていく劇場”のビジョンを体現したコンサートになり、今、とても興奮しています！石丸さんの歌、倉田さんのダンス、ミュージシャンによる素晴らしい演奏、そして、テクニカルスタッフ・制作陣の高い技術……劇場の出せるチカラをすべて出し切ったコンサートでした。これからも、芸術監督団は三者三様の個性を最大限に生かして、みなさまの“居場所”を劇場の中につくっていきたいです。

MESSAGE

さすがの歌唱力、軽妙な司会で存在感を発揮した石丸幹二アドバイザー

ゼネラルアートアドバイザー

石丸幹二

スタートのこの段階で監督団の３人が一緒に舞台に立てたのは良かったです。このコンサートが私たちの名刺代わりになり、観客の皆様に「私たちはこういう者です」と知っていただけたかと思います。今回は、『０歳からお年寄りまでのコンサート』と銘打っていました。おかげさまであらゆる世代の人たちが集まってくださり、劇場は大にぎわい。個人的には、（子どもたちはもちろん）子育てするお父さん、お母さんにも聴いてもらいたいという思いが強く湧きましたね。このように、私たちはそれぞれの専門分野を中心にいろいろな企画を考えています。市民芸術館を、皆さんが「また帰ってきたい」と思えるような“ホーム”に育てるべく活動していきたいと願っております。

ダンスの振り付けや自ら即興で踊ることで観客と交流した倉田翠監督

芸術監督【舞踊部門】

倉田 翠

石丸さんがこの機会を与えてくれたからこそ挑めたことがたくさんありました。「パプリカ」の振り付けを独自につくって客席の皆さんと一緒に踊りましたが、お子さんたちがとても素直にやってくれて、逆に私自身がひらかれていき、踊らせてもらっている気持ちになりました。また今回、私の作品はどちらかといえば尖っていると言われるものが多いので、普段は見にくることがないであろう客層の人たちと出会えたこともうれしい体験でした。今後はダンスを中心にやっていくのですが、“ダンス”という枠にとらわれず、この出会いを次につなげ、さまざまな人に出会っていきたいと思っています。

Cast

akakilike『希望の家』
日程：2024年6月8日(土)～9日(日)
会場：まつもと市民芸術館 特設会場
演出・構成：倉田翠
出演：倉田翠　桑折現
白神ももこ　前田耕平　吉田凪詐

[akakilike]
演出助手：平澤直幸
照明：魚森理恵
音響：甲田徹

[スタッフ]
舞台監督：守山真利恵
衣装：藤谷香子
制作：豊山佳美　清水聡美

Photo : Takeshi Yamada

希望の家はどこにあるか？

初めて訪ねたまつもと市民芸術館は予想以上に巨大な施設だった。客席と舞台を逆転させた今回の特殊な上演形態が、余計にそれを強調していた。同館の芸術監督（舞踊部門）に就任した倉田翠は、最初の仕事として、自身のカンパニーであるakakilikeの完全新作を、そこで発表することを選んだ。タイトルは『希望の家』。倉田翠の作品なのだから、この「希望」が単純な意味であるわけがない。倉田自身を含め演者は5名。俳優の桑折現、吉田凪詐、ダンサーの白神ももこ、現代美術家の前田耕平。テーマ（？）は「結婚式」である。

倉田翠の舞台の作り方は、出演者（薬物依存者からオフィスワーカーまで多種多様である）からじっくりと話を聞き、各々の記憶と経験をもとにセリフを紡ぎ出し、それらを緻密かつ劇的に編集して、ひとつながりの時間と、ある特定の空間に落とし込む。倉田はダンサーであり振付家だが、もちろんダンスの要素もあるが近年の作品は演劇的と呼ばれることも多く、カテゴライズ不能の領域に入っている。ドキュメンタリー的なスタイルとも言えるが、実際にはフィクション（記憶違いや嘘なども含む）の手触りも強く、虚実を超えて人間存在のギリギリの真実を掴み出すような、極めてユニークな作風を確立している。倉田が観客の眼前に出現させる「何か」はいつも、途轍もなく強靭で、切実で儚く、恐ろしくも優しい。『希望の家』もそうだった。

結婚式の式次第をなぞって舞台は進行していった。だが、新郎はローラースケートで走り回り、新婦は踊り、司会は招待客（観客）を煽りながら喋りまくり、青年はぶつぶつと詩のような言葉を呟き、友人代表は下手くそなピアノを弾く。その全てがハイテンション&ドラマチックで、ひたすら圧倒される。akakilikeではいつものことだが、だからといって慣れるわけではない。とにかく強烈なのだ。

では「希望」は？　それが反語なら、つまり本当は「絶望」が描かれていたのなら、それはそれで簡単に過ぎる。倉田翠はそんなズルはしない。彼女は、彼女たちは、ちゃんと希望を描いていた。だが、その希望のなんと異様なことか！　いや、あれこそがほんとうの希望だったのかもしれない。

『希望の家』は7月に東京公演も行われた。そちらも観たが、同じ作品であるにもかかわらず松本とはかなり感触が異なっていた。場所が、土地が変わり、そこに住む人たち、そこに居る人たちが変われば、希望の姿も変わる。当然のことだ。

佐々木敦（批評家）

嘘のない誠実な芝居作りの余韻が漂う佳作

CAST

2024年5月16日(木)～19日(日)
まつもと市民芸術館小ホール

ひなの：小林きな子
福留：星野勇太
歩：下地尚子
誠二／父：荒井正樹
池添：草光純太
清子：長野里美

【STAFF】
脚本：田村孝裕
演出：福士誠治
音楽：濱田貴司
美術・衣裳：池宮城直美
照明：赤田智宏
音響：中島正人
演出助手：葛西祥太
舞台監督：三月一

Photo : Takeshi Yamada

REVIEW

まつもと市民芸術館プロデュース

『女40歳 肉屋のムスメ』

年齢と共に家族関係は変わっていく。変化のタイミングは個々に異なるが、親子間では子が成長し、自我に目覚めて親の庇護や束縛、支配から脱することが変化の端緒になるのだろう。

娘・ひなのと母・清子。この母子の「変化」はかなり遅めだ。タイトル通り、ひなの40歳にして初めてらしい精神的独立宣言が、今作『女40歳 肉屋のムスメ』のクライマックスなのだから。

2014年に劇団ONEOR 8 の劇作家・演出家の田村孝裕が俳優・星野園美の依頼により執筆した今作。出発点は極私的ながら、そこに描かれる人づきあいの息苦しさや潜在的な差別意識、捻じれた親子関係などは10年経った今、さらに生々しく観る者に迫る。

持論を正論（正義）として振りかざす清子の言動は、さながらネット民のよう。己の振る舞いが娘を傷つけていることさえ気づかない様子はもはや暴力で、それをカラッと体現する長野里美の演技が光る。逆に、己の環境に自己を主張することなく耐え、あらゆるものをため込むひなのの健気さと、爆発する瞬間のギャップを小林きな子が好演。松本拠点のシアターランポンに所属する下地尚子、荒井正樹、草光純太らの絶妙のアンサンブルと、浪人生役・星野勇太の所在なさげな佇まいが好対照を見せる。

小さな町の小さな精肉店、その家族の物語。そんなささやかな劇世界に血肉を通わせたのは、戯曲を深く読み込み、俳優というものを熟知したうえで寄り添う福士誠治の演出だろう。嘘のない誠実な創作過程の余韻が舞台上には確かにあり、そんな座組から、再び生まれ来る作品との再会を念じて劇場を後にした。

大堀久美子(編集者)

Interview

松本の皆さんにやっと観てもらえる！時代を超えて共感できる現代版歌舞伎

木ノ下歌舞伎 主宰　木ノ下裕一

まつもと市民芸術館 芸術監督団団長・木ノ下裕一のインタビュー第2弾は、自身が主宰する木ノ下歌舞伎のこと、10月に公演を控える『三人吉三廓初買（さんにんきちさくるわのはつがい）』のことを伺いました。『三人吉三』は木ノ下歌舞伎の代表作。しかも、上演時間5時間を超える大作です。その魅力とは？

――いろいろなところでお話されてると思いますが、改めて、松本のみなさんに、木ノ下歌舞伎のことを教えてください。

歌舞伎に興味を持ったのは、高校2年生のとき。大阪の扇町公園で平成中村座の公演を見たんです。くしくも前総監督・串田和美さんの演出で、歌舞伎のイメージを覆すダイナミックなもので衝撃的でした。その後、僕は映像・舞台芸術学科のある大学に進学し、在学中に自分のやりたいことを考える中で、歌舞伎をもっといろんな解釈で上演したら面白いのではないかと思い、木ノ下歌舞伎を立ち上げました。旗揚げにあたってリーディング公演を行ったんですが、大学の先輩だった杉原邦生さんに演出をお願いした縁で、そこから2017年まで一緒に劇団メンバーとして活動をしてきました。

――歌舞伎の現代的な解釈、その面白さはどのようなところにありますか？

歌舞伎は江戸当時の時代を映したものです。それが、数百年という時間を飛び越えて、現代とつながるところがやはり最大の魅力だと考えています。昔は重要だったけれど、今は薄れてしまった感覚なんかもたくさんありますが、その中にも現代に通じる部分があるんです。例えば『三人吉三』。作者の河竹黙阿弥は因果応報をテーマに書いていますが、今は因果応報なんてあまり流行らない。でも人間関係が密になりすぎて苦しかったり、何気ない行為が他人に思わぬ影響を与えてしまうことは現代でもありますよね。置き換えることで現代でもしっかり刺さると思いながら制作しています。やはり時代を超えて親しまれている作品だからこそ、いろいろな解釈が可能になる。お客様には、こんなふうに新しく解釈したんだと驚いてほしいし、時には「私の解釈と違う」と思ってもらってもいい。そこから対話が生まれてくるといいなと思っています。

――今、例に挙げていただいた『三人吉三』は、10月に公演されるんですよね。

木ノ下歌舞伎としては2014年に初演、2015年に再演していて、今回が3演めになります。ただ初演から10年経っていることもあり、演出は以前と同じ杉原さんですが、演出を一新、ほぼ新作です（笑）。同時に、現行の歌舞伎ではカットされてしまう吉原での花魁・一重と文里の場面や地獄の場も含め完全復活するというスタンスは初演以来大切にしていて、『三人吉三廓初買』と、正式外題に改めたのも、その決意の表れです。

――キャスティングのポイントはありますか？

和尚吉三役の田中俊介さんは影のある野性味が役にぴったりです。立ち回りシーンも多いお坊吉三は、須賀健太さんのキレのある身体性が十分いかされるだろうし、なによりチャーミングなお坊になるでしょう。坂口涼太郎さん演じるお嬢吉三は、女装の盗賊ですが、クールさと哀しさを繊細に表現してくださると思う。それから川平慈英さんは、以前に杉原さん演出の舞台で拝見してその存在感に圧倒されました。川平さんは土左衛門伝吉という凄みのあるお役なので、きっと素晴らしい演技で魅せてくださると思います。

東京芸術劇場Presents木ノ下歌舞伎『三人吉三廓初買』
2024年10月5日（土）、6日（日）まつもと市民芸術館主ホール
作：河竹黙阿弥　監修・補綴：木ノ下裕一　演出：杉原邦生［KUNIO］
出演：田中俊介　須賀健太　坂口涼太郎　／　藤野涼子　小日向星一
深沢萌華　武谷公雄　高山のえみ　山口航太　武居卓　田中佑弥
緑川史絵　／　川平慈英　／　緒川たまき　眞島秀和

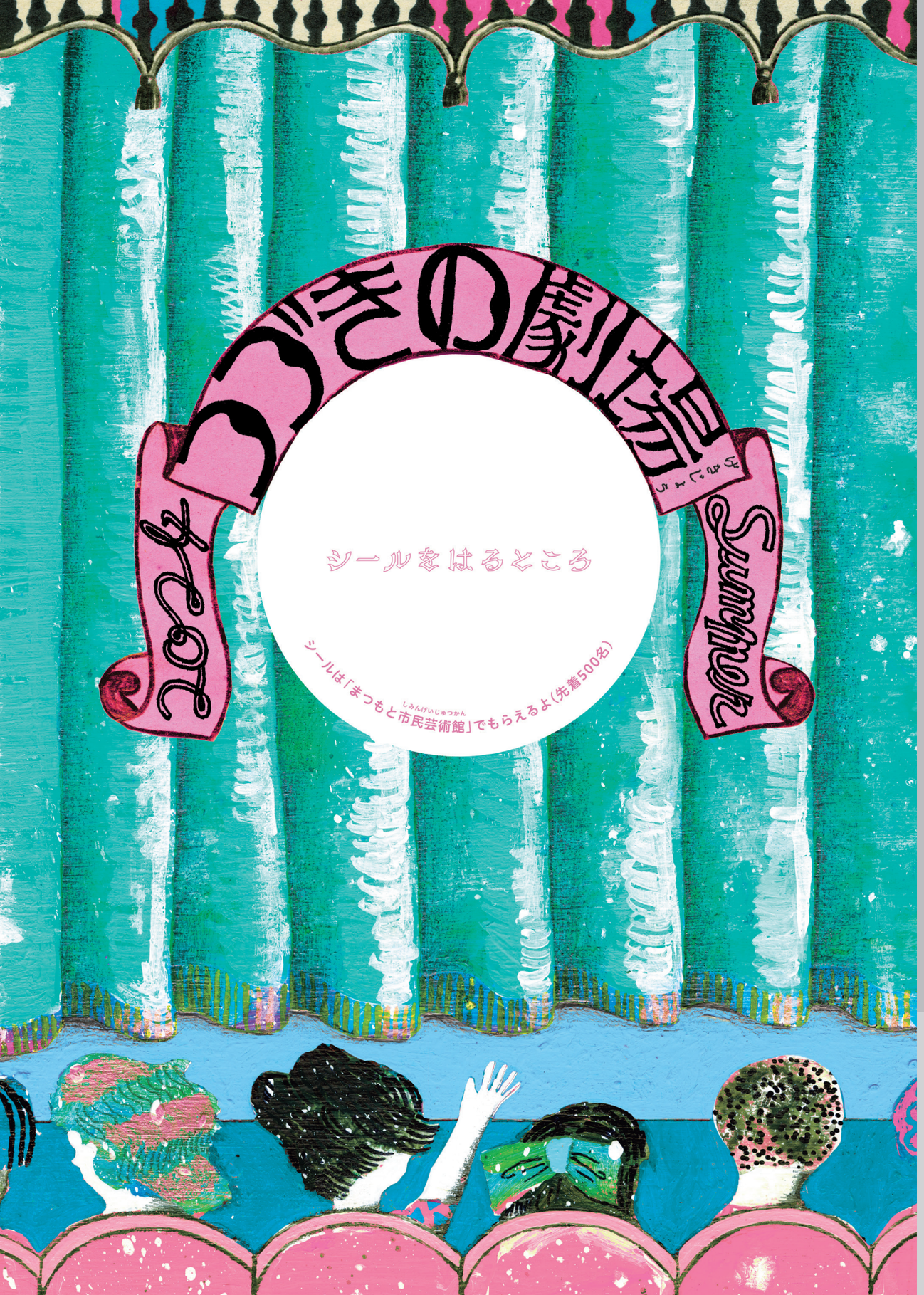
――松本では芸術監督としての自身の初公演になりますね。

はい。特に『三人吉三』は、実は2020年にコロナ禍で松本公演が中止になってしまったんです。そのリベンジであるということと、今年度からは芸術監督団団長に就任したということで、2つの意味で「やっと観てもらえる!!」という思いが強いですね。改めてまつもと市民芸術館がハイスペックな劇場であることと、あたたかいスタッフの方々がいることを感じています。そして、松本という街には、「帰ってきたな〜!」というホーム感みたいなものも最近感じつつあります。

――芸術監督団として掲げられている「ひらいていく」というコンセプトは、歌舞伎を現代にひらいていくという木ノ下歌舞伎の姿勢に通じるようにも感じます。

そうですね、木ノ下歌舞伎を、ひいては歌舞伎を「どうすればもっと多くのお客様に届けられるだろうか」というのは、一貫して私の長年の課題です。信州・まつもと大歌舞伎の関連事業をさせてもらったことはもちろん、地域に対してもそうですし、舞台というものを障がいのある方にも見ていただくにはどうしたらいいか、どうひらいていくかなどもそうですね。今回は『三人吉三廓初買』の関連イベントとして物語についてのレクチャー、歌舞伎の台本のつくり方を体験するワークショップを行うなど、事前に作品に興味を持っていただくような準備をします。今後もさまざまな試みをしたいと思っています。

Text:Daichi Matsunaga



公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

Information

SIDE A B

チケット発売中

東京芸術劇場Presents 木ノ下歌舞伎
『三人吉三廓初買』

10月5日(土) 13:00／6日(日) 13:00
主ホール

作：河竹黙阿弥
監修・補綴：木ノ下裕一
演出：杉原邦生［KUNIO］
出演：
田中俊介　須賀健太　坂口涼太郎　／
藤野涼子　小日向星一　深沢萌華
武谷公雄　高山のえみ　山口航太　武居卓
田中佑弥　緑川史絵
川平慈英　／　緒川たまき　眞島秀和

料金：全席指定（税込）
一般 ¥5,400／U25 ¥2,000

■今回紹介の公演は、未就学児入場不可。
また、U25チケットは枚数限定、前売のみ。
当日は年齢確認証をご提示ください。
※『UP AND DOWN』は除く

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報、『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk（＝キャットウォーク）とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩くことのない細い回廊のことを言います。

『Catwalk／ねこあるき』Vol.4

2024年 8 月30日発行

発行　まつもと市民芸術館
〒390-0815
長野県松本市深志３丁目10番１号
Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830
E-mail mpac@mpac.jp
URL https://www.mpac.jp

編集　いまいこういち（『engawa』）
デザイン　清水貴栄・小林慎太郎
印刷　藤原印刷株式会社
＊禁無断転載

■郵送サービス

『Catwalk／ねこあるき』の郵送をご希望の方は、郵送費用分の切手（1号140円）を下記へお送りいただければ送付いたします。その際、お名前・ご住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志３丁目10番１号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の劇場施設などに置いております。

■チケット購入・お問い合わせ

［まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内］
①電話 0263-33-2200（10:00-18:00）
②インターネット https://www.mpac.jp
（要事前会員登録・無料）
③窓口 芸術館１階（10:00-18:00）

［芸術館チケットクラブのご案内］

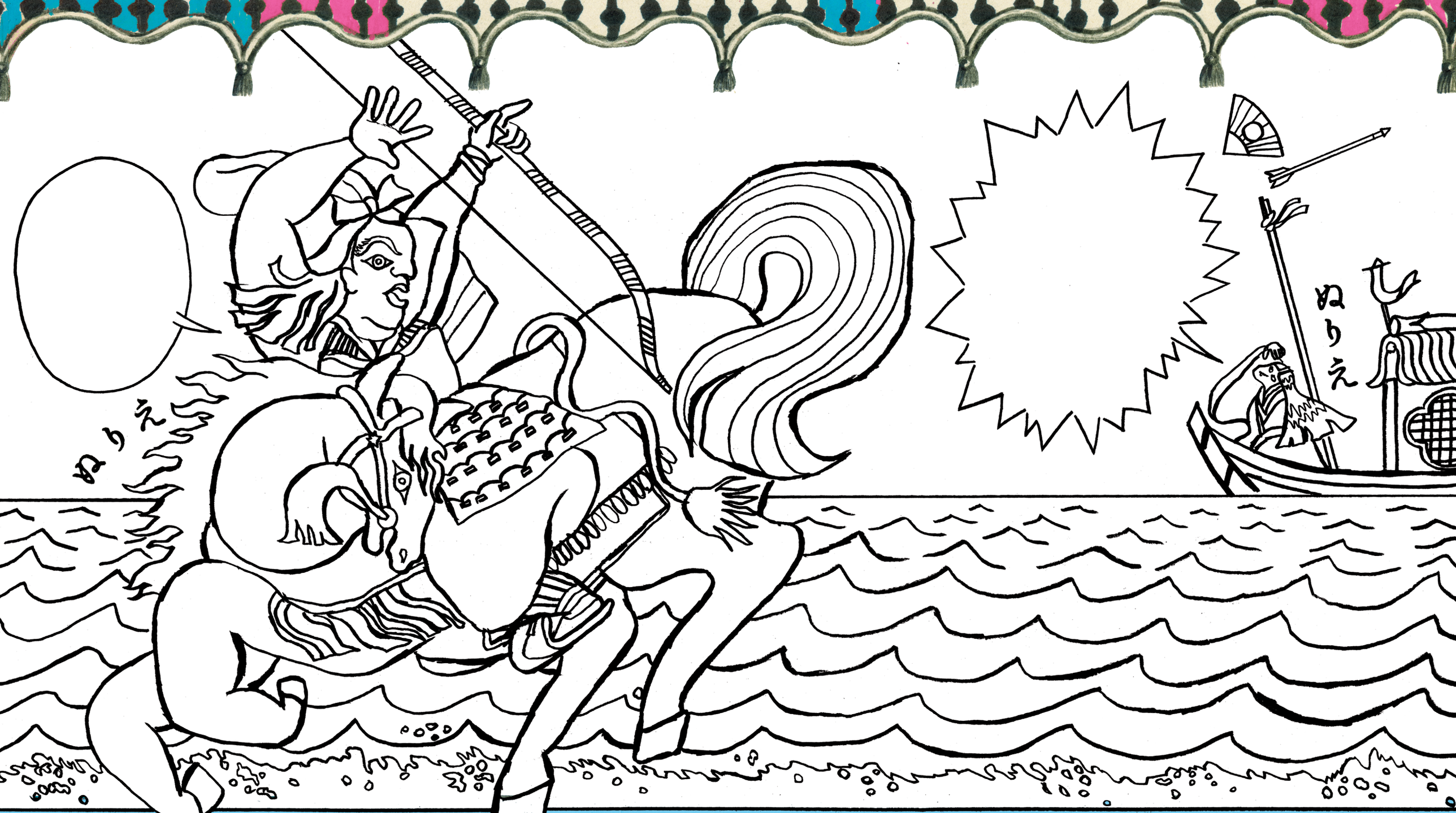
※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。
※インターネット予約が可能（一部公演をのぞく）。
※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。
※ご希望の方には、スケジュールガイド、公演チラシを送付。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口（東口）より、
駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口（東口）から
「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

※駐車場の用意はございません。
　公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。
※近隣商業施設等への無断駐車は
　他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。



ここは「つづきの劇場」です。役者たちに 色と セリフが まだ ついていません。

続きを かいて 劇を 完成させてください。完成できたら 金メダルシールを もらえます。

Information

公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

SIDE
A
B

9月14日発売

ひらく古典のトビラ 其の3
声と音でめぐる古典文学の世界

11月2日(土) 16:00
実験劇場

企画・構成・進行：木ノ下裕一
出演：加賀美幸子　成河
琵琶演奏：塩高和之

料金：全席指定（税込）
一般 ¥3,500／U25 ¥1,500
セット券 ¥6,000

■セット券の注意事項
「ひらく古典のトビラ 其の3」一般券1枚と、
「ひらく古典のトビラ 其の4」一般券1枚のセット券です。
2公演で一般7,000円のところ6,000円でご覧いただけます。
前売券およびまつもと市民芸術館チケットセンターのみ取り扱い。
予定枚数に達した時点で販売終了となります。

9月14日発売

ひらく古典のトビラ 其の4
木ノ下亭〜ことばとおと〜

12月1日(日) 15:00
小ホール

[落語] 桂米團治
[浪曲] 玉川奈々福（浪曲師）、広沢美舟（曲師）
[活弁] 山崎バニラ（活弁士）
席亭：木ノ下裕一

料金：全席指定（税込）
一般 ¥3,500／U25 ¥1,500
セット券 ¥6,000

■セット券の注意事項
・「ひらく古典のトビラ 其の3」一般券1枚と、
「ひらく古典のトビラ 其の4」一般券1枚のセット券です。
・2公演で一般7,000円のところ6,000円でご覧いただけます。
・前売券およびまつもと市民芸術館チケットセンターのみ取り扱い。
・予定枚数に達した時点で販売終了となります。

撮影：橘蓮二

9月28日発売

『石丸幹二コンサート withクリヤ・マコト』 ちょっと懐かしい歌たち

11月9日(土) 15:00
小ホール

出演：石丸幹二　クリヤ・マコト

料金：全席指定（税込）
一般 ¥5,800／U25 ¥2,000

10月19日発売

チャオ！パンビーニ2024秋
ひびのこづえ ダンスパフォーマンス
『UP AND DOWN』

11月23日(土) 14:00／24日(日) 14:00
実験劇場

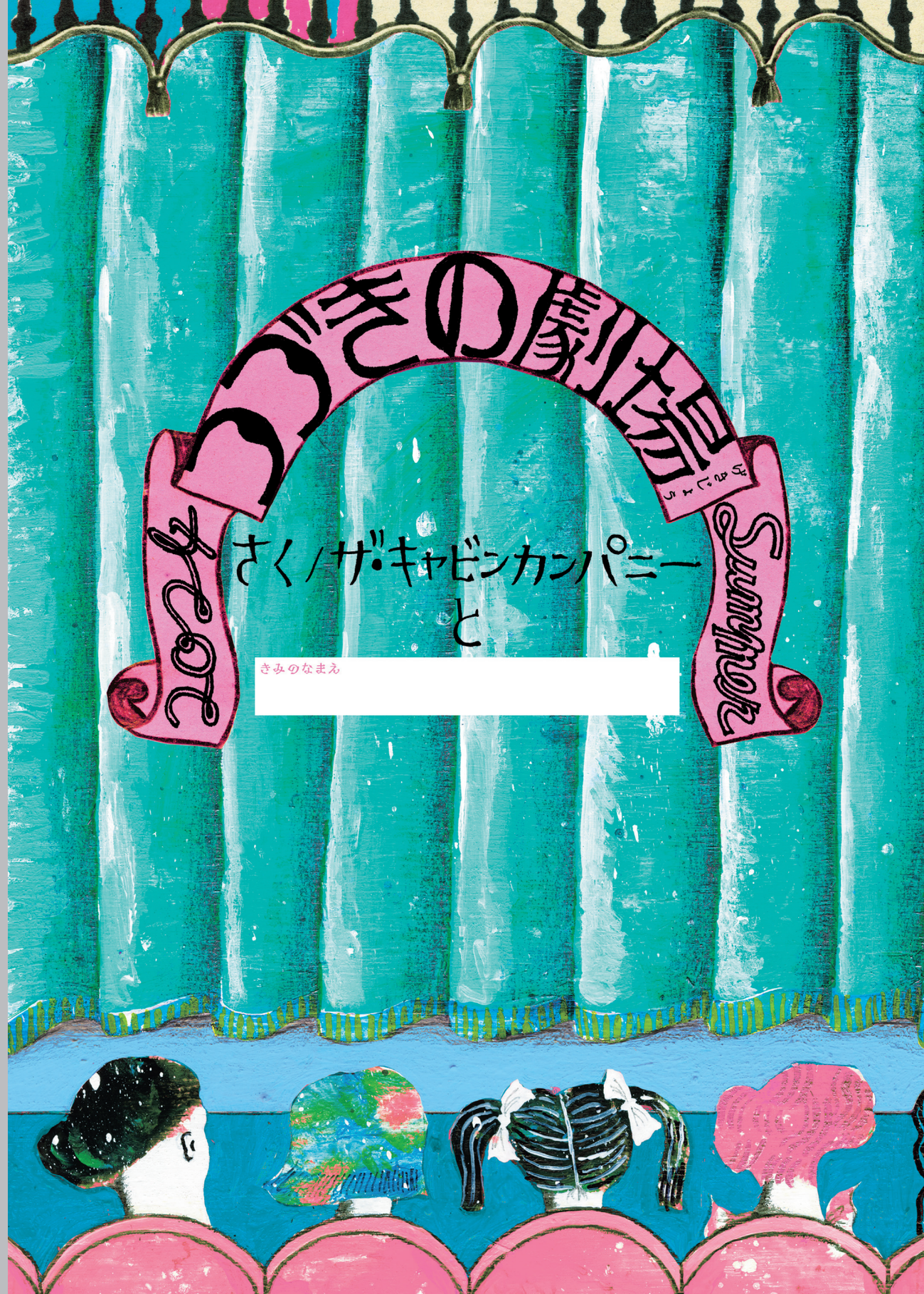
出演：大宮大奨、川合ロン、高村月
音楽：原摩利彦
衣裳：ひびのこづえ

料金：整理番号付自由席（税込）
一般 ¥2,500／U25 ¥500

※3歳以下は保護者1名につき1名まで膝上鑑賞無料。
※U25チケットは当日年齢確認証提示。

おやこ券￥2,500
（正価￥3,000のところ）

※前売券および
まつもと市民芸術館
チケットセンターのみ取り扱い。
※おやこ券は一般：1名と
U25：1名のペア券です。
※予定枚数に達した時点で
販売終了となります。



信州大学×芸術館

文化芸術が街を輝かせる

第四回

信州大学人文学部 英米言語文化 助教
田所朱莉さん

「文化芸術が街を輝かせる」第４弾は信州大学人文学部英米言語文化コースの田所朱莉さんにご登場いただきました。田所先生は、大阪大学外国語学部英語専攻出身で、博士号を取得してからこの春まで同大学で１年間働き、信州大学へは赴任したばかり。演劇を研究される先生がいらっしゃるのは初めてとあってお話を伺いに行きました。すると松本市と意外なご縁がありました。

――まず先生の専門について教えていただけますでしょうか。

大きな枠組みで申し上げればアメリカ文学です。文学というジャンルは、詩・小説・散文・演劇などに分けることができますが、私は現代アメリカ演劇を専門にしています。現在は、スーザン＝ロリ・パークス（1963～）というアフリカ系アメリカ人の女性劇作家を研究対象にしています。アメリカ演劇の研究者の中でも、パークスを専門とする日本人研究者は珍しいかもしれません。

――スーザン＝ロリ・パークスはどんな作家ですか。

彼女の劇作理念は「歴史の書き換え」です。パークスによると、アフリカ系アメリカ人の歴史は、「記録されず、切断され、洗い流された」ものです。つまり、アフリカ系アメリカ人の歴史は、教科書のような書物には記述されずに忘れ去られてしまい、権威化された「文学史」と「歴史」は白人中心的なものであるということです。このような理念は、ほかのアフリカ系アメリカ人の作家にも通じるものですが、パークスの特異性は、アフリカ系アメリカ人の経験も含めた「新たな」歴史を実際に舞台上で創造しようとする点にあります。事実、パークスは「ポゼッション」というエッセイのなかで、歴史が記録・記憶された出来事であるがために、「劇場は歴史を創り上げる完璧な場所」、「歴史的出来事の孵化器」であると語っています。

――先生はなぜ彼女に興味を持ったのですか？

もともと映画が好きで、中高時代は１日中映画を観ていても飽きないほどでした。大学２年の終わりにゼミを選ぶときに、映画がご専門の先生がおらず、小説のゼミか演劇のゼミで迷ったのですが、当時の指導教官の研究内容に魅せられ、演劇を選びました。また、人が「観る」ことを前提にしたメディアであるという点で、演劇も映画に通ずるところがあると考えました。学び始めると、演じる側と観客が同じ空間に同時共存するという演劇の特性に関心を持ち始めました。そのような学びを進めるなかで、学部４年生のときにパークスの作品に出会いました。パークスが歴史の書き換えを行っているならば、何らかの形で観客の意識にも影響が及ぶはずですし、パークスがどのように「歴史の書き換え」を目論む作品を創作しているのか、そして具体的にどのように「歴史が書き換えられていくのか」を知りたくなりました。現在は、パークスのドラマツルギー（劇作法）研究を主なテーマとして研究を進めています。

田所先生が研究しているパークスの戯曲たち。The America Play（左奥）は、肌の色以外リンカーン大統領に瓜二つの黒人の男が、リンカーン大統領暗殺事件を繰り返し再現する物語。Topdog/Underdog（The America Playの右隣）にもリンカーン大統領の扮装をする黒人というモチーフが登場する。Venus（左手前）は南部アフリカからイギリスに連れて行かれ、巨大な臀部ゆえに見世物にされたコイコイ族の女性をモデルにした戯曲。

――大学ではどんな授業をされるのですか？

今年度の前期はオーガスト・ウィルソンというアフリカ系アメリカ人の男性劇作家の作品を扱っています。ウィルソンは20世紀のアフリカ系アメリカ人の歴史を10年ごとに区切り、全10作で描く「サイクル劇」を手がけています。すべてを半期で読み終えるのは難しいですから、作品を厳選して授業で扱っています。後期はパークスの歴史劇を扱う予定です。ゼミでは台本を読んで、台本のテキスト分析を行うという小説の研究と似たような手法を採っています。ただ、劇を実際に演じ、演出することで初めて見えてくる側面もあるので、実際にパフォーマンスをする授業も後期から開講予定です。大阪大学では、実際に劇の一部分を演じたうえで、役になりきって質問に答える授業を開講していました。演劇をテキストとして読み解いていくのも楽しいですが、自分を劇の世界に没入させることで得られる気づきもあるのです。例えば、ト書きや小道具に着目して、そのような演出を通して得られる視聴覚的な効果を考えていくことも、演劇を研究する上で重要な要素です。特に、何度も上演されていくなかで、演出家の視点や解釈によって変わるのも演劇の面白さですから。言い方を変えれば、可変性というのかな、どんどん息を吹き込まれて、時代の流れに沿いながら生き抜いていくような、生き物のように変わっていくところも演劇の魅力の一つだと思いますね。

――松本にいらっしゃるまでにはどんな経緯があったのでしょう？

2018年に大阪大学を卒業、同大学の旧言語文化研究科（現人文学研究科）の博士前期課程・博士後期課程に進学し、2023年３月に言語文化学の博士号を取得しました。その後、大阪大学で１年間特任助教（常勤）として勤務しておりました。その間に、信州大学で英語文学を専門とする公募を見つけました。実は、私は松本で生まれ、３歳まで住んでいました。今も91歳になる祖母が一人暮らしをしています。何か不思議な縁を感じて、迷わず応募し、ご縁をいただきました。

――芸術館にはどんな印象がありますか？

まだ松本に来たばかりで、芸術館でどんな催しがあるのかも存じ上げない状況ですが、松本は芸術の街ですから、さまざまな場所を訪れ、鑑賞することをとても楽しみにしています。できればパークスでないにせよ、松本市でもアメリカ演劇と関わる機会を得られればうれしいです。そして、何か私にも役立つことや、芸術館と一緒に交流できることがあれば、これほどうれしいことはありません。

SHINSHU UNIVERSITY × PERFORMING ARTS CENTRE

有名になりたいわけでもないし、引き受けた以上は劇場や街を盛り上げていきたいし、一生懸命やるけれど、この立場の私と、私がやっていることは全然違う速度で周知されていくのかもしれません。ダンスを広げるのもミッションですが、そう簡単ではありません。でもメジャーにならないラインのことをやってることに関して、すごく価値を感じています。

前田　そうですね。たまたま来て、その空間で目撃したものとしての価値があると思います。

―― 前田さんは野らぼうの活動をどういう思いでやっているのですか? 生き様? 趣味？ライフワーク?

前田　自分に対して仕事にしろよ的な思いはありますね。倉田さんが有名性も無名性も取れるのはすごいことですよ。そのためにはスキル、技術が必要で、僕は有名性を取りたくないわけじゃなく、取れてないだけ。そこを取れよ、つまり仕事にしろよという思いはあります。ここ数年そこを頑張らなきゃとやっています。

倉田　私がダンスの作家向け講座をするときに言うのは、距離感さえわかっておけばいいということ。やりたいことと、生きるためにやらざるを得ないことの距離感ね。表現で食べているわけではないけれど、これがないと生きていかれない人たちがいる。必死にアルバイトをしながらも表現で生きていこうとする人もいる。実家が金持ちだからできる、別にこのあり方もいい。その距離感だけ見据えておけば、自分が何をしなければいけないかがわかるから、仕事にするためにはどっちに振ればいいか明確になります。前田さんはそれをずっと続けていらっしゃるじゃないですか、そのことにまず価値があると思うんです。

前田　６年前に松本に来たときも、音楽と仕事を２足のわらじでやっている方がいて、でもどっちも楽しそうにされている。現場系の仕事だから自分で何でもつくれる。そういう人たちの界隈に出会ったからこそ、僕も自分で便利屋を始めて、仕事をしながらいろいろな現場で道具の使い方を覚えて、芝居もしてきた。でも最近はそれができなくなってきた。脚本を書きたいのもあるけど、脳内がパッパラパーなんですよ。同時に走っているラインが多いのかな？

倉田　私は３本までと決めているんです。同時に走らせるラインが多いと一個一個がぼやけてきません？どれから手をつけていいのか？って。

前田　なるなるなる（苦笑）。

倉田　私の場合はクリエーション脳を走らせるのは二個まではいける。もう一個入ってくると、優先順位がわからなくなるし、一個一個に出せるポテンシャルが下がる。私は生活を捨てていますから、このラインがカットされているのは強いですよ。

前田　ははは！　それは真似できません（笑）。ま、テント芝居は生活も表現です！

MEET & TALK with "Matsumoto"

いよいよ４月から活動をスタートした芸術監督団。芸術監督３名が街に飛び出して市民の皆さんと語り合う企画の第４弾は、ダンス部門を担当する倉田翠と、あがたの森公園を拠点に野外劇、テント公演を行っている劇団「野らぼう」主宰の前田斜めさんの顔合わせ。野らぼうは、「せんがわ劇場演劇コンクール2023」で３部門を受賞したことから取材も増え、演劇界でも話題を集めています。この日は稽古場兼アトリエであるmarsmoo（マーズモー）STUDIOに伺いました。手づくりの空間のあちらこちらには前田さんの思いが詰まっています。

テント芝居は、生きることとつながっている。

―― 倉田さんは以前から前田さんに会ってみたかったそうですね。

倉田　私は若いころ、京都の小さな空間で創作していたこともあって、松本でもそういう方々とアクセスしたかったんです。私自身まだ松本の情報も少ないころから「野らぼう」さんのお名前をよく聞いていて。前田さんも移住されてこられたんですよね？

前田　僕は鹿児島出身で、大学は札幌でした。その後は旅劇団「どくんご」に所属してずっと旅していて。旅が一段落し、札幌に戻り、松本に引っ越しました。

倉田　何か決め手があって来られたんですか？

前田　創作の可能性を求めて場所を探していて、いろいろな候補がある中で、街のサイズ感が決め手でした。

倉田　松本の街はどうですか？

前田　僕、マジで街に出ないんです。ずっとここにこもって何かしている。実は芝居はやっていても、もともとはたくさんの人に見てもらうことに興味がなくて、お客さんがいてもいなくてもやっていたから。でも最近は芝居でも映画でも、その場に集った人たちとしゃべらないのは超もったいないと思うようになりました。公演後に会場で打ち上げをするんですけど、それがすごく尊い時間に感じられています。

倉田　何かがひらけてきたのかな？　でもこもっている時期も大事ですよね。私も2018年まで京都からまったく出なかった。コンペティションに作品を出して、賞を獲って上っていくという流れにあえて乗らなかった。「なんで東京に出なあかんねん」って。でも京都では仕事にならず、自分から東京に出たタイミングがありました。けれど今のスタイルを築けたのは、この京都時代だと思いますね。

―― 前田さんは松本だからこそできたことがあると感じたことはありますか?

前田　それは話す必要がありますよね、きっと。

一同　笑い

倉田　前田さん、社会性あるじゃないですか（笑）。

前田　活動するにあたって、条件があって。一番シンプルなことは公園が借りられるかどうか。なおかつ稽古場を安く持てること。もともと旅が大好きなんですけど、旅をしていても現地にいる人に憧れるから、幸せにはなれないんですよね。ならば現地の人にならなければと思って旅をやめました。最初は定住することがすごくストレスでしたけど、地に足をつけて根を生やしたいと思っていたので、最初の数年は松本のみの活動でした。そして県外にも出るようになって、少しずつ旅が戻ってきたんです。その過程で、結婚して、子どもも生まれて、今に至っているという感じです。

倉田　お話を聞いていると、松本に定住したことは大きなことだったんですね。家族ができ、生活の比重が高まるとプラプラしていられないじゃないですか。そのときに自分の欲求をどうしても押さえなきゃいけない。そのバランスをとるために、このアトリエでずっと活動されているのかなと思いました。

前田　そうした活動の中でサイクルができてきたかもしれません。先日も東京で公演したんですけど、あがたの森でやっていること、来てくださるお客さんが大事だと改めて感じました。芝居が好きとかじゃなくて、近いから来る人もいる。会場と近いからとつながれることはすごく大事だなと。ただ芝居をよく観ている人たちではないので、フィードバックがあまりない。言葉が欲しいから外にも出始めたんです。

倉田　松本の中で独自に関係性をつくられたんですね。

前田　縁ができてきた感じでしょうか。それこそテント界隈のつながりもできました。

倉田　テント界隈？

前田　テント界隈は独特のつながりがあります。絶滅危惧種ですけど（笑）。

倉田　唐十郎さんもお亡くなりになりましたしね。

前田　唐さん世代が70、80代だとすると、どくんごが50、60代。だから僕らは本当に担い手というか、

倉田　継承者じゃないですか！　テント芝居は60、70年代の時代の象徴でした。若者がそこに集まった。あのカッコ良さを引き継ぐ人も減ってきてますよね。

前田　そうですね。僕はテント芝居を見て、やり始めて、一旦やめて、また自分で新たに目指し始めたんですけど、今がとても面白いですね。

倉田　野外でやること、テントの魅力は何ですか？

前田　野外とテントは別物として捉えているんですけど、テントの魅力はもっとも自分たちの理想を組み込み、立ち上げられることですね。こういう素晴らしい施設もあると言われても、「いや、こっちがいい、こちらでやりたい」と思うし、美しく見える。

倉田　野外劇は街を借景したり、そこが野外であることをフィーチャーする。テントは理想的な閉鎖空間をある時間だけつくるということですね。

前田　そう。だから野外とはちょっと違います。テントは空間をつくるためか、生きることとつながっているように思います。

倉田　なるほど、面白いなあ。私も今でこそ芸術監督だったり、大きな仕事もいただいているけれど、akakilikeという団体としては毎年自主公演をするように決めていて、手づくりのバランスをとっている。大きくなっていくことがすべてではなく、初期の衝動を消さないようにすることが重要ですよね。

前田　有名性の一方で、無名性も大事ですよね。

倉田　松本が楽しいのは、私のことなど誰も知らないところ。それ最高です。

前田　なるほど。

倉田　芸術監督として１年ぐらい通っているので、よく行くお店や知人も増えてきたけれども、akakilikeの倉田翠を知っているということとはまったく文脈が違います。これはめちゃくちゃ面白い。喫煙所で出会うお姉ちゃんみたいな（笑）。ここからまた芸術監督として仕事していくわけやから、また別の負荷がかかってくるわけですけど、めちゃくちゃ気持ちが楽です。

前田　でも芸術監督という前に出る立場だから、出過ぎて一気に倉田さんの存在が広まってしまうのはもったいないですね。

倉田　いやいや。テレビで宣伝をしても、『希望の家』はお客さんは一回150人として、公演は２日間だから300人くらい。メディアに出ていくことと、ダンスが急に広がるのとはまったく別だと感じます。別に

前田斜め　Naname Maeda

劇団野らぼう主宰・作演出・役者。表現の可能性を求めて松本市にたどり着く。自前のテント劇場での公演実現を目指し、現在は野外劇スタイルでの表現を探求。 場所や条件に合わせた作品づくりを基本としており、作品のコンセプトから創作することを特徴としている。これまでに創作した作品に、居酒屋を巡る“流し芝居”、毎朝駅前で行う“駅前朝芝居”、説明が難しい“音声同期型サイレント朝芝居”、身長３m40cmの巨大人形を使った“移動型無言劇”、太陽光発電によって電力を賄う“ゼロカーボン演劇”など。第13回せんがわ劇場演劇コンクール2023グランプリ・劇作家賞受賞・演出家賞受賞により、2024年に同劇場で公演を行う。

倉田 翠　Midori Kurata

３歳よりクラシックバレエ、モダンバレエを始める。京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）映像・舞台芸術学科を卒業後、京都を拠点に、演出家・振付家・ダンサーとして活動。作品ごとに自身や他者と向かい合い、そこに生じる事象を舞台構造を使ってフィクションとして立ち上がらせることで「ダンス」の可能性を探求している。出演者もプロのダンサーや俳優だけでなく、一般市民、薬物依存回復施設の入所者、オフィスワーカーなどさまざま。2016年にはakakilikeを旗揚げ。アクターとスタッフが対等な立ち位置で作品に関わることを目指して活動している。

Creative Art Village Aida ムム

ダンサーの大宮大奨さんが移住し、築200年の古民家を自ら改修した、感性と人間力を育むアート施設です。スタジオでは、ヨガ、ダンス、各種エクササイズ、ストレッチの教室も。

先日は当施設にお越しいただきましてありがとうございました。芸術監督団のお三方の印象は三者三様の温かさを持ち合わせた方々で、いつまでもご一緒して話せるようなそんな気さくな方々でした。そんな各分野のスペシャリストであるお三方には、より多くの市民が劇場に足を運んだり、地域住民が文化芸術に触れる機会が増えるコンテンツ制作に力を入れてもらいたいと思いますし、私らの施設もその為にお力添え出来ることがあれば是非とも手を取り合って活動していきたいと考えます。（大宮大奨さん）

安曇保育園

安曇稲核地区にあり、年間を通して自然物と触れ合うことができる自然保育で有名です。

乗鞍BASE いがやレクリエーションランド

北アルプス・乗鞍岳を望む標高1500メートルに位置し、体験型のアクティビティーとキャンプサイトを併設している施設。

乗鞍ふれあいパーク

講演会や音楽会などに使える多目的ホール、陶芸や染物などができるカルチャー室、そば打ちなどが体験できる調理室などを備えた乗鞍地域の交流施設です。

松本市 図書館 中山文庫

松本市の南東部に位置する、バスがシンボルの中山文庫。かつては私財を投げ打って多くの科学教育を実践した折井英治さんが開設した私設の図書館でした。

芸術監督団の皆様の第一の印象は“若々しい”というものでした。明るく、はつらつとした受け答え、よく通る声質からそのような印象を受けました。また、瞬発力の良さを感じました。社交辞令的な話の雰囲気から、ご自身の感性にハマった瞬間、言葉に熱がこもり力強い発信力により、その場の雰囲気が一変しました。今回、フレッシュな３人の芸術監督をお迎えしたのですから、より市民に親しまれる市民芸術館になって欲しい。そのためにも芸術監督の皆様には今回、市内の施設を視察されたように多くの松本市民との出会いを積み重ねていただきたい。きっと、松本市民は芸術監督団のファンになると思います。（館長 中村尚文さん）

ウッディ・もっく

松本市の奈川高原にある日帰り温泉やキャンプが楽しめる施設。

あがたの森文化会館講堂

大正８年に開校した旧制松本高等学校（講堂は大正11年建築）を活用した文化施設。西洋建築様式を簡略化して応用した木造洋風建築で、日本の学校建築史上でも貴重な建造物です。

松本のことをより知って、深め、新たなアイデアを生み出す旅「監督団がゆく！」は、第２弾、第３弾と続きます。次は皆さんのお住まいの地域にも伺いますよ！

松本を知り、広げてつなげる。

監督団がゆく！

芸術監督としてのデビューとなるコンサート『はじめまして！』を終えた３人は早々に、次なる展開のために動き出した。芸術監督団として“ひらいていく劇場”というコンセプトを掲げているが、それは、ホールの中にとどまらず、街に飛び出していくことも含んでいる。そして、芸術館が改修に入る時期を見越して、中心市街地ばかりではなく芸術館にアクセスしにくい地域にも文化芸術を届けようとしているのだ。５月のとある３日間、地域の会場やキーマンを訪ねた。

NPO法人ケ・セラ／ケ・セラ塾

「音楽で飯を食う」をコンセプトに2002年に立ち上げられた、就労継続支援B型事業所。次回の定期演奏会は、いよいよ、まつもと市民芸術館主ホールです。

芸術監督団の皆様は、私たち楽団ケ・セラの定期演奏会に向けた練習を見学してくださいました。監督団の皆様が楽しみながら聴いてくださったことで、ケ・セラメンバーは大喜び！涙を流して感激するメンバーもいました。演奏の後にも、一人ひとりと写真を撮ってくださったり、お話を聞いてくださったりと、私たちにとって大きな励みとなり、定期演奏会に向けての意欲がさらに高まりました。素敵な機会をいただき、心から感謝しております。（横山康浩さん）

弦楽器いづつ

ヴァイオリン職人・井筒信一さんによる制作工房です。北海道の楓と赤エゾマツを使用した弦楽器制作だけでなく、制作教室・音楽教室も行っています。

芸術監督の皆さんとお話しできてとてもよかったですよ。どなたか私の制作した楽器を弾いていただくとか、できたらいいなあと思いましたね。
芸術館って、文化芸術に興味がある人には素晴らしい施設なんだけど、あまり興味がない人からたまに聞かれるんですよ、「何をやるところなの？」って。そっかまだまだ知らない人も多いのかぁと驚くばかりか「俺たちはそんなとこには行かないよ」なんて言われるものだから「それじゃあもったいないよ」と言い返すんです。もっともっと催しを中心にピーアールを頑張っていただくといいと思うんですよ。特に高齢者にもわかるようにね。芸術館の魅力や催しをどんどん伝えてほしい。こういうタイトルで、こういう中身でと伝えてほしい。私は特に催しなどなくてもたまに様子を見に行くんですよ。正面の大階段が好きですね。誰にでも気軽に行かれる場所になってほしいと思います。
(井筒信一さん)

ヴィオ・パーク劇場

音楽、演劇、ダンス、アート、クラフト、パフォーマンスなど、すべての表現者と観察者のための表現空間です。カフェも併設。

今年度から芸術監督がお三方になられた、それも違った分野の方々がそろったから、催しもさらにさまざまなジャンルのものが増えていくんでしょうかね、楽しみにしております。ヴィオ・パークも、松本のアーティストの皆さんが使ってくださるわけですが、土間のようなフロアで場所が場所だけにいろいろな使い方をしてくださいます。建物を生かした、工夫した演出をしてくださるからこそ、いつも面白い舞台ができているなぁと思いながら見ています。以前は前衛アートの方たちが来てくださっていましたけどね、自然にある素材で作った空間ですから、あまり現代的な催しには向いていないかもしれません。でも観客とすぐそばで触れ合えるところがヴィオ・パーク劇場の魅力でしょうね。芸術館はしばらく改修されるんですよね？催しで繋がるのも面白い。うちで何かできるかな？　規模が小さすぎて、こっそりやらないといけないんじゃない（笑）。（オーナー 竹川寛子さん）

松本市 住民自治局
奈川地区地域づくりセンター（奈川文化センター夢の森）

岐阜県の飛騨高山地方と接する奈川地区、標高1000メートル以上に建つ文化活動のための施設です。この地区に伝わる１頭の大獅子をなぎなたで仕留めるまでをつづった奈川獅子舞は市重要無形民俗文化財です。

去る５月９日、まつもと市民芸術館芸術監督団の皆様が、私たちの奈川地区を訪問され、主に奈川文化センター夢の森の施設を見学されました。
お三方とも大変気さくで、館内を回りながらいろいろお話をしましたが、コンベンションホールのステージ上で、手を打って反響を確認されたときは「さすがプロ！」と感じました。本施設は開館から約30年が経過し、舞台装置や音響設備はかなり古いタイプですが、本施設の活用の可能性をいろいろお話してくださいましたので、まつもと市民芸術館からは遠く離れた場所にあっても、地区内外の皆さんが大勢訪れ、一流の芸術文化に触れる機会をいただけたなら本当に嬉しく思います。（センター長　奥原喜照さん）

アルプス公園

西に北アルプス連峰や安曇野が一望でき、東には美ヶ原と松本市街を望むことができます。

奈川獅子舞（提供：奈川地区地域づくりセンター）

平日のアルプス公園

連休に友達が東京から遊びに来た。一通り街を歩いたあと、松本を高いところから見てもらいたいと思い、一緒にアルプス公園へ行った。実は、これまで私にとってアルプス公園はあまり馴染みがない場所だった。誰かに連れてきてもらうのでなく、自分の意思で来たのはその時が初めてで、ぼんやりした記憶とナビを頼りに向かうと、東側の駐車場に辿り着いてしまった。

入口は三箇所あり、展望を求める多くの人は南側に車を停める。記憶の中の公園と雰囲気が違って焦ったが、おかげで私の中のアルプス公園のイメージが大きく変わった。広々していて、沢山の鳥の声と緑の匂い。その時は５月だったので、ツツジの花が咲いていて一面サーモンピンク色の中、弁当を食べる夫婦と私たちだけがいた。

まるで知らない場所に来たような風景が良かったので、今回改めてアルプス公園を訪れることにした。気圧の変化で耳が詰まるのを治しながら、無事に南側に到着。見覚えのある野外ステージを見つけ、大きな岩場のような遊具を右手に進む。見晴らしの良い広場に出るまでのアプローチは子供じゃなくてもワクワクする。設計した人もそう思って作っただろう。若いお父さんと小さな子供がピクニックをしたりアスレチックに登ったり、遊び尽くしていた。気温が30度を越えた平日の昼過ぎは人が少なく、誰も歩いていない道は非現実的で夢の中みたいだ。舗装されていない森の中を一人で通ると緊張する。

汗だくで車に戻って２本目の水筒を飲み、いつものラジオをかけたら、子供の頃に遊びに来た帰り道の雰囲気だった。公園の北も東もまだ全ての道を歩き尽くしていなくて、知らない場所が残されていることが嬉しい。

Illustration & Text

otama

太田真紀／イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。otama-ki.com

［特集］

松本を知り、広げてつなげる

監督団がゆく！

ねこまつもと

vol.
04
2024
Summer

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre